

フルートと管弦楽のための協奏曲

W.A.モーツァルト

Konzerte für Flöte und Orchester
Wolfgang Amadeus Mozart

◆◆第6回

講師・有田正広



今回はフルート協奏曲 ニ長調 KV 314 第3楽章です。

第3楽章は、ハプスブルク家の筆写パート譜(H.Mus.)に大きな混乱があります。場所は152小節からのフガートの部分で、具体的には158小節から164小節までの第1ヴァイオリンからヴィオラまでの弦パートです。①旧モーツァルト全集ではその混乱をそのまま引き継ぎ、現行のBREITKOPF版もその混乱を踏襲しています。②新モーツァルト全集が編纂されてこの混乱は修正されたので、BÄRENREITERの楽譜ではこの不具合は直っています。また、現在BREITKOPF社でもHENLE社から出版されたピアノ伴奏譜とタイアップして、オーケストラ用のスコアとパート譜の新版が出版され始めているので、いずれこのBREITKOPF社の第2番の楽譜も修正されることでしょう。





①

163

②




オーボエ協奏曲 ハ長調の同じ部分

Rondeau No. 3

③冒頭のアウフタクトで始まるフルート・ソロの4つの16分音符はH.Mus.でもBÄRENREITERやHENLEでもとなっていますが、当時の一般的な考え方からいうと2つのスラーになります。オーケストラでは18小節目に同じ部分がありますが、こちらは2つのスラーになっています。何故ソロだけがこのようになったのかは分かりませんが、ここは2つのスラーに直す方が良いでしょう。ちなみに、オーボエ協奏曲のソロ・パートの冒頭は2つのスラーになっていて、その後は両方の形が出てきますが、オーケストラ・パートは全て2つのスラーです。同じ考え方から、5小節の2拍目のG-E-Fis-Dもではなくになります。このような部分が随所にあるので、第4回(VOL.90)でも触れましたが、バロックの伝統からくるテクスチュアによるアーティキュレーションの付け方などを参考に検討して下さい。

④例えば64小節からのアーティキュレーションに関して言うと、64小節はこのままでいいとして、65小節は最初の

⑧

2つの音のみスラー、66小節はこのまま、67小節は65小節と同じで68小節も最初の2つの音のみにスラーを付けるという具合です。69小節はになっていますが全て2つずつのスラー  だと思います。

⑤その先の85小節は最初の2つのみスラーで、86小節の1拍目は2つずつのスラーといったことが例として挙げられると思います。この3楽章については、演奏上の大きな問題は少なく、むしろアーティキュレーションの問題、そして音のシェイプ、パッセージのシェイプをいかに出すかということだと思います。

⑥少し戻りますが、オーケストラの序奏が終わった後、55小節目からフルートのソロが出てきて58小節のDの音にトリラーを付けるかどうか若干問

題になります。H.Mus.には|は付いていませんが、現代のフルートで演奏する場合にはよくトリラーが付けられます。これは倚音で、それをトリラーで飾るのは極めて一般的なことですから付けても構いません。ここに|が付けられていないのは、当時のフルートでこのDの音にトリラーを付けるのは非常に困難で、実際にも指使いがありません。そのために|を省き、その代わりにスラーで表情を付けて演奏しています。⑦次の62小節のGはトリラーが可能な音なので|が付けられ、モーツァルトはこの様に書き分けています。そして、この59小節からのメロディーは同じことの繰り返しなので、即興演奏をすることをお勧めします。⑧ザルツブルクのオーボエ協奏曲の筆写譜には元の2分音符のほかに装飾音形が入れてあります。
| |

| |

| |

| |

⑨

16 Solo.

184.

⑨ 123小節にアインガンクが用意されていますが、これは極めて短いものが良いでしょう。

⑩ 167小節ではト長調で終わり突然ホ短調になりますが、その2拍目のHの音が次の小節のHにタイで結ばれています。これは典型的なSuspisatio (休止あるいは沈黙によって作り出されるフィギュール。歌詞の内容を描写したり、驚き、溜息、恐れ、戸惑い等から導き出される休止によって旋律が分断されるもの)です。⑪ザルツブルクのオーボエ協奏曲の筆写譜にはこの音が168小節のアウフタクトの8分音符として書かれ、タイは付いていません(ゴリツキーの復元版はフルート協奏曲と同じにしています)。当時、小節をまたぐタイは大変珍しい書法だったので、おそらくザルツブルクのオーボエ奏者はこのタイを見たときにモーツァルトのミスだと思い、このようなオーボ

⑪

⑫

⑬

200

218

⑫'

エ・パートに書き直したのでしょうか。ここでは大きな溜息をついたかのようなHの音でソロを開始して下さい。そうすることで、ト長調の音が急にホ短調のHの音に置き換えられたという印象が出るはずです。

⑫ また、190小節目はH.Mus.では1小節全体に1つのスラーが付いています。直後の192小節は1拍目が16分音符4つに1つのスラー、2拍目が2つの音にスラーが付く、後の2つはスタッカートになっているので、BÄRENREITER版では190小節をこの192小節に合せてあり、HENLE版はH.Mus.と同じです。⑫' オーボエ協奏曲には本来この音形は出てきませんが、イン

ゴ・ゴリツキーの復元版にはこの音形があり、190・192小節ともに1小節全体にかかる大きなスラーが付いてあります。私は、ここはH.Mus.に準拠して190小節は大きなスラーで演奏し、192小節はそれに変化が付けてあるのが良いと思います。そして、このスラーを採用する場合は、1・2楽章でも説明したように非常に大きな表情が要求されることになります。

⑬ 205小節からのフルート・ソロにはオーケストラ・プレイヤーの役割を持ったAのロングトーンが用意されています。そして209小節目からtrが付けられていますが、これは長い音を演奏していて退屈し、このあたりからトリ

250 SOLO

257 TUTTI

カデンツァの例

ラーを始めるという感じで、しかも初めから急激な動きでトリラーを始めるのではなく、ゆっくり始めて次第に加速していくという演奏がいいでしょう。

⑭250小節のカデンツァですが、アイングンク2つ、あるいは3つ位のそれほど長くないもので、この速く軽快なロンドの音楽に合わせた楽しいカデンツァを作ると良いでしょう。

⑮その後の252・253小節の2分音符に付けられている前打音の長さは決めることが出来ません。短く演奏するもよし、アクセントを付けて短く演奏するもよし、2つ目のEisには少し長い表情を付けるもよしで各自で判断して下さい。

⑯255・256小節に、小節をまたいだスラーがありますが、これは、ここまで2拍子で演奏されてきた拍子感を失わせるような表情、かなり自由な表情があってもいいでしょう。18世紀の作

曲家だったモーツァルトは、オーケストラのパートにフェルマータこそ書きませんでしたが、ここにはフェルマータのような表情があって、直後のロンドのテーマが出てくる所はフルートのアウトタクトで始まりますから、フルートが自由に吹いてもオーケストラは問題なく入ることが出来ます。ですから、この小節をまたいだスラーを聴かせることも可能です。

では最後に、この250小節のカデンツァで、私が作った例の一つをご紹介しますので、参考にして下さい。■



有田正広 (ありたまさひろ)
昭和音楽大学教授
桐朋学園大学古楽器科講師